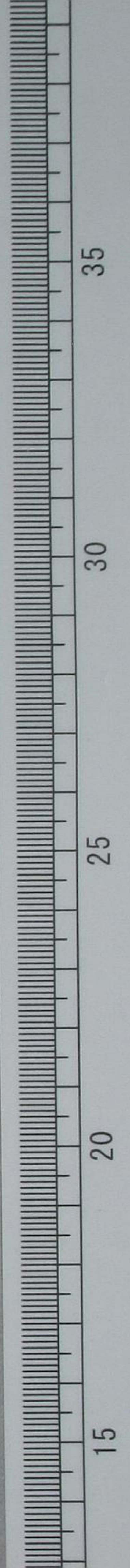


近世名家傳

渡邊脩次郎編輯

上

柳田文庫
文庫11
A1699
1



文庫11  
A1679  
1

渡邊脩次郎編輯

近世名家傳

東京書林 青山堂發兌

近世名家傳

近世名家傳

心  
花

心  
心

心

心

心

明治二十六年六月  
付子玉



序

英人斯邁兒氏曰ク豪傑士君子ノ傳記ハ世ノ裨益トナルコト少ナカラズ其卓乎獨立ノ氣象其剛毅敢為ノ志操其忍耐勉強ノ作業其忠信篤敬ノ言行ヲ觀ルルハ人ヲシテ興起奮勵志ヲ立テシムルニ足レリト宜ナルカナ言ヤ近來我國變動ノ際名人偉士陸續輩出シ其履歷世ニ傳フベキモノ甚タ多ク既ニ歐米ノ書ニシテ日本人ノ略傳ヲ抄録スルモノアリ余曾テ某新聞社ノ囑托ヲ受ケテ今世ノ人物傳ヲ草ス其未タ刊行セザル者若干アリ空ク筐底ニ埋ムルモ亦遺憾ナリ乃チ之ニ校正ヲ加ヘ或ハ其人ニ就テ之ヲ質シ

或ハ諸誌ヲ参考シ以テ此書ヲ編ス其疎謬ノ如キ讀者ノ是正ヲ待ツノミ

明治十一年七月

渡邊修次郎記

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



目次

卷之上

(イ) 伊藤博文	一	(タ) 谷干城	十三
伊地知正治	二	田中不二麿	十五
岩倉具視	二	(ソ) 副嶋種臣	十六
板垣退助	五	(ツ) 津田仙	十八
(ヲ) 小倉處平	七	(ナ) 成嶋柳北	十九
(カ) 川路利良	八	中根雪江	廿一
勝安芳	九	(ハ) 村田新八	廿一
(コ) 吉田清成	十一	(ニ) 井上馨	廿二
横山正太郎	十二	(オ) 大鳥圭介	廿四

近世名家傳  
目錄

大久保利通

廿五

大木喬任

廿九

大隈重信

其

(ノ) 黒田清隆

三十

大山綱良

其

栗本鋤雲

三十一

卷之下

(ヤ) 山縣有朋

一

榎本武揚

十二

山田顕義

二

(テ) 寺嶋宗則

十四

(マ) 前原一誠

四

(ア) 有栖川熾仁親王

同

(フ) 福地源一郎

五

(サ) 西郷従道

十五

福沢諭吉

六

西郷隆盛

十七

(コ) 後藤象次郎

八

佐藤舜海同進

十八

(工) 江藤新平

九

三條實美

廿三

(キ) 水戸孝允

廿五

波沢栄一

廿三

桐野利秋

廿五

(ヒ) 東伏見嘉彰親王

廿五

(シ) 篠原國幹

廿五

(モ) 森有禮

廿五

島津久光

廿五

近世名家傳卷之上

○伊藤博文

渡辺修次郎

君ハ長州ノ人天保十一年二千五ヲ以テ生ル初ノ俊  
 介ト稱ス性穎敏学漢洋ニ通ス曾テ英国ニ留学ス其  
 才幹アルヲ以テ維新ノ初メ徵サレテ恭與ト為リ外  
 国事務局判事ヲ兼子又大坂府判事ト為リ尋テ兵庫  
 縣知事ニ轉ス時ニ攘夷ノ餘論未タ跡ヲ絶タス激徒  
 數々起リ非常ノ国難ニ際シタレ氏能ク之ヲ弥縫シ  
 以テ大ナル禍機ヲ生スルニ至ラシメザリシハ君ノ  
 功居多ナリ其後チ大蔵少輔ト為リ米國ニ至ル又工

近世名家傳 卷上





部大輔ニ轉ス鑛道創造ノ議アルヤ當時ノ論者ハ多ク之ヲ誹議セシニ関セス君ハ見ル所アリテ大隈恭議ト共ニ尽力シ遂ニ其功ヲ奏スルニ至リ世人ハ其便ヲ稱シ政府ハ君ノ功ヲ賞ス明治四年特命全權大使歐米ニ發ス君水戸大久保山口ト共ニ之カ副タリ米國桑港ニ於テ饗應ノ時君使節發遣ノ所以ト本邦開化ノ景況ヲ演述シ大ニ喝采ヲ得タリ同六年大使一行各國ヲ巡行シ畢リテ歸朝ス此時ニ當リテ征韓ノ議方サニ熾ンナリ君歸朝ノ大臣ト共ニ其ノ非ヲ唱ヘシカバ西郷等ハ退職シ君ヲ以テ恭議兼ニ任シ正四位ニ叙ス同七年大久保氏ノ支那ニ赴キ

シ時君内務卿ノ事務ヲ兼理ス既ニシテ地方官會議ヲ開カントシ君議長ノ命ヲ受ケシガ會マ國ニ難ニ依テ止ム臺灣支那ノ事局ヲ結ブニ至リ朝野ノ間ニ勢力ヲ有スル水戸板垣諸氏ノ如キ各々其ノ郷國ニ歸リ互ニ乖離ノ状ナキニ非レハ井上馨氏ハ之ヲ憂ヒ中間ニ居テ周旋シ諸氏ヲシテ大坂ニ集合セシム之ヲ大坂會議ト云フ君亦會シテ共ニ前途施政ノ方向ヲ議シ遂ニ皆ナ東京ニ至リ君及ビ水戸大久保板垣ハ政体取調ノ命ヲ受ケ同八年四月十四日立憲政体起立ノ詔實ニ爰ニ基セリ文壇論者ノ過激ニシテ政府ノ處置ヲ誹議スル如キ君ノ最モ憂フル所

ニシテ廟堂ニ於テ屢々之ヲ言ヒシカ遂ニ讒謗律新  
聞條例ノ發行アルニ及ヘリ同九年太政大臣及ヒ諸  
叅議ト共ニ北海道並ニ二羽ノ地方ヲ巡回シ其景況  
ヲ視察シテ歸ル同十年西京ニ赴キ鹿兒嶋ノ警報ヲ  
ルニ及ンデ止テ機務ニ參ス叛徒平ラギ君東京ニ歸  
リ大久保氏等ト共ニ勲一等ニ叙シ旭日大綬章ヲ賜  
フ君ハ久シク内閣ニ在リ近頃又法制局長官並ニ議  
定官ヲ兼テ明治十一年地方官會議ノ議長トナリ尋  
テ工部卿ヲ罷メ内務卿ヲ兼ヌ

○伊地知正治

君ハ鹿兒嶋ノ人漢學ヲ善クシ武ニ達ス夙ニ董王

志ヲ懷キ西郷隆盛海江田信義等ト意ヲ同フ上國  
ニ往来ス維新ノ際薩軍ニ將トシテ京都ニ在リ  
慶喜ノ入朝スルヤ兵ヲシテ先驅セシム君之ヲ謀知  
シケレバ長州ノ將山田頭義ト議シ朝廷ニ奏シテ其  
ノ処分ヲ請ヒシニ朝議便宜事ニ從フヲ許ス二將即  
チ兵ヲ以テ伏見鳥羽ノ関門ヲ塞キ守備ヲ修メテ待  
チ幕兵ノ進ムニ及ンテ君ハ薩軍ヲ指揮シ奮撃シテ  
之ヲ卻ク尋テ參謀トシテ東下シ奥羽ニ至ル諸將先  
ツ諸城ヲ降シテ後チニ會津ヲ攻メント欲ス君板垣  
參謀ト議シテ曰ク北地氷雪早ク至ル急ニ會津ヲ取  
ルニ如カズ會津陷ラハ其他ノ諸城風靡スベキノミ

近世名家傳 卷上  
ト議乃チ決シ遂ニ攻テ奥羽諸藩ヲ下ス朝廷其功ヲ  
賞シ賜フニ祿千石ヲ以テス君藩ニ歸リテ大參事ト  
為ル廢藩ノ後チ左院ノ中議官ニ任セラレ又大議官  
ニ副議長ニ進ミ終ニ議長ニ昇ル曾テ位階並ニ歳俸  
條例ヲ定メンテ建議ス明治七年山縣黑田ニ氏ト  
共ニ參議ニ任セラルル明年一等侍講ニ轉シ又修史館  
總裁ト為リ其後チ請フテ郷里ニ歸ル

○岩倉具視

君ハ具慶ノ子天性聰明ニシテ言語爽快ナリ弱冠ニ  
シテ侍從タリ孝明帝嘗テ御詠アリテ短冊ヲ書  
氏左右之ヲ供スル能ハズ君慨歎シテ退キ所司代去

ニ其狀ヲ告ケ供御ノ欠乏ヲ補フベキヲ論ジ  
某大ニ感動シ為メニ私金ヲ獻ス安政五年  
氏上京シテ開港ノ敕許ヲ請ヒシニ君等連署シテ之  
ヲ拒ム其後幕吏公武合体シテ攘夷ノ功ヲ成スベキ  
ヲ言ヒシニ君之ヲ然リトシ其說ニ左祖ス然ルニ和  
宮既ニ將軍ニ降嫁シテ鎖港ノ事成ラサルヲ以テ朝  
廷事ニ関スル朝臣數名ヲ責ム君亦之ニ坐シ髮ヲ削  
リテ蟄居ス勤王ノ士皆君ヲ目シテ佐幕家ト為シ敢  
テ近ク者モ無カリシが大橋慎三、香川敬三、玉松操、北  
嶋秀朝ハ君ノ素意ヲ知り密カニ君ノ為ニ奔走シ西  
郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、後藤象次郎、坂本竜馬等

ト謀ヲ通ズ而シテ幕吏ハ未ダ之ヲ知ラザルナリ雖  
新ノ日君蟄居ヲ赦ルサレ復飾シテ參與ト為ル尋テ  
議定ニ進ミ副總裁ヲ兼子又輔相ト為リシカ幾クモ  
ナク之ヲ辞ス明治二年大納言ト為ル詔シテ賞典祿  
五千石ヲ賜フ同三年勅使トシテ薩長ニ至リ島津毛  
利ノ両氏ニ諭シテ上京セシム同四年外務卿ニ轉ズ  
帝親カラ其邸ニ臨ミ勅シテ曰ク「一新以來日夜精ヲ  
励マシ治ヲ圖リ今日ノ盛業ニ至ルモ汝具視ノ功居  
多ナリ依テ親臨シ以テ其功劳ヲ謝スト尋テ右大臣  
ニ昇リ特命全權大使トシテ歐米各國ヲ巡回同六  
年歸朝ス時ニ征韓ノ議アリ君等其非ヲ辨論シ之

ヲ止ム此際ニ當リ三條太政大臣疾アリ朝ニ出  
帝親カラ君ノ邸ニ臨ミ救シテ太政大臣ニ代  
政ヲ輔翼セシム征韓論ヲ主張スル者或ハ不平ヲ懷  
キ同七年一月十四日夜高知縣士數名君ノ退朝ヲ赤  
坂喰違ニ要シ馬車ヲ遮ル君瘋ヲ受クト虽モ幸ニシ  
テ逃レ日ナラズシテ愈ユ其後從一位ニ進ミ又勲一  
等ニ叙ス同九年奥羽巡幸ノ時供奉シ尋テ西京行幸  
ニ先ツテ彼地ニ赴キ暫クシテ歸京ス

○板垣退助

君ハ土州ノ人性鯁直武ニ通ス曾テ甲斐ニ遊ヒ板垣  
信形武田信玄ノ人ト為リヲ慕ヒ自ラ正形ト名乗リ

シト云戊辰ノ役君藩兵ノ大隊長ト為リ谷千城小軍  
監ト為リテ東下シ勝沼壬生等ニ戦ヒ奥羽ニ進ンテ  
白川三春棚倉ヲ破リ伊地知正治ト議シカヲ合セテ  
會津ヲ下ス奥羽征討ノ役君ヲ以テ殊功ト為ス朝廷  
之ヲ賞シ賜フニ祿千石ヲ以テス明治二年參與ト為  
ル既ニシテ府藩縣ノ制度ヲ定ムルニ當リ君ヲ以テ  
高知大參事ト為ス蓋シ天下ノ人心未ダ計ルベカラ  
ザルヲ以テ有力者ヲシテ之ヲ鎮撫セシメントスレ  
バナリ同四年西郷木戸高知ニ來リ廢藩ノ事ヲ議シ  
相伴フテ上京ス頭官ノ任免アルニ及ビ君西郷等參  
議ト為ル廢藩置縣ノ偉績實ニ此ノ際ニ成レリ

リ内閣ニ在テ政機ヲ執リシガ同六年西郷等外務  
ノ議ヲ主張シテ行ハレス共ニ官ヲ罷同七年  
藤等ト連署シテ民撰議院設立ノ議ヲ建白ス天下ノ  
人心一時此ノ論題ニ傾キ多クハ君等ノ説ニ左祖ス  
同八年大坂會議ノ時君高知ヨリ集合シ木戸大久保  
伊藤諸氏ト相議シ遂ニ共ニ東京ニ至リ三條太政大  
臣ニ會シテ政府ヲ改革スルヲ議シ立法官ト行政  
官ヲ分チ參議ノ各省長官ヲ兼任スルヲ罷メントス  
帝君ヲ召見シテ其意見ヲ採用スルノ勅アリ木戸ト  
共ニ再ヒ參議ト為シ政体取調ヲ命ズ君常ニ内閣分  
離ノ説ヲ主張シ朝鮮ノ警報アリシヨリ益々軋轢ヲ

生ス太政大臣ハ朝鮮事件ノ結局ヲ待テ決セントシ  
帝亦君ニ諭シ諸大臣ト同心協力セシム時ニ島津左  
大臣偶々君ノ説ニ合シ大臣ヲ勅奏セシガ遂ニ勅裁  
ヲ以テ二氏ノ議ヲ採用セザルノ命アリ二氏退職ス  
初メ戊辰ノ役君大鳥圭介ト各其ノ軍ニ將トシテ日  
光今市會津ニ相戦ヒシヨリ殆ント十年ニ垂<sup>ナシ</sup>ントシ  
互ニ憾ヲ宿メザレドモ席堂公見ノ外私ニ相會スル  
ノ意アリテ未ダ其機ヲ得ザリシヲ栗本鋤雲ハ聞テ  
大ニ感シ一日両氏及ビ後藤象次郎ヲ上野ノ精養軒  
ニ招キ共ニ款語アリタリ是ヨリ先キ高知<sup>ト</sup>同  
ト立志社ヲ立テ其持論ヲ守ル鹿兒嶋ノ叛徒<sup>ト</sup>起<sup>ル</sup>

君東京ヨリ高知ニ歸リ縣士ヲシテ輕拳ナカラ<sup>シ</sup>  
ガ為ニカヲ尽セリ世君ヲ推シテ民権<sup>ヲ</sup>泰<sup>シ</sup>  
為ス

○小倉慶平

小倉ハ日向國<sup>ヲ</sup>飲肥<sup>ノ</sup>人ナリ性剛毅ニシテ武ヲ嗜ミ  
最モ槍術ヲ善クス弱冠ニ及ンテ文事ノ忽セニスヘ  
カラサルヲ悟リ乃チ東京ニ遊学ス幾クモナクシテ  
戊辰ノ變アリ藩命ヲ以テ屢々京授及ビ長崎ノ間ニ  
往來シ軍器ヲシテ乏シカラザラシメタリ其後再ヒ  
東京ニ至リ南校ニ入ル數月ニシテ大學權大丞ニ拔  
擢セラレ尋テ英國ニ官遊シ留学數年其業大ニ進シ

近世名賢傳 卷二

テ帰朝ス当時留學生數百人ニ下ラズト虽モ小倉ヲ  
 以テ最トス此時ニ當テ征韓論方サニ盛シナリ西郷  
 等征韓ノ行ハレサルヲ以テ退ク小倉モ亦不平ヲ懷  
 テ飲肥ニ歸リ壯士ヲ召ンテ誓テ云ク思フニ他日征  
 韓ノ事ナシトスベカラス其時ハ先鋒トナリ以テ国  
 ニ報ゼント陰ニ兵器ヲ蓄ヘ武事ヲ講ス既ニシテ江  
 藤新平兵ヲ起シテ敗走シ終ニ飲肥ニ至テ小倉ニ投  
 ズ小倉友義ヲ重ンシ竊カニ輕舸ヲ雇フテ江藤等ヲ  
 逃レシム江藤等刑ニ就クニ及ンテ小倉モ亦法ニ坐  
 シ禁錮數月期滿チテ放免セラレ復々東京ニ歸リ陸  
 軍省ノ雇ト為リ七等官ノ相當タリ然ルニ政府ニ

置テ喜ハズ常快々トシテ樂マザリシガ鹿兒嶋  
 徒起ルヲ聞キ相共ニ兵ヲ奉ケント欲直チ  
 ニ歸リ鹿兒嶋ニ至リ日向ノ兵ヲ以テ豊後ヲ衝キ官  
 軍ヲシテ後顧セシメントス西郷等其策ヲ知ルト虽  
 モ危疑シテ之ヲ止メ且ツ來援ヲ乞ハシム小倉拒ン  
 テ上京建議スル所アラントス然ルニ肥後ノ戦ヒ益  
 ヲ急ニシテ其朋友多ク戦死シケレハ義傍觀スベカ  
 ラズトテ再ビ飲肥ニ入り兵ヲ率井豊後ニ出テ屢  
 ヲ官軍ト戦フテ勝タズ微傷ヲ被リ延岡ニ退テ療養  
 セシカ事ノ成ラサルヲ知り遂ニ從容屠服シテ死ス  
 時ニ明治十年八月ナリ小倉曾テ前原等ト交リ頗ル

聲名アリ里人稱シテ飲肥ノ西郷トス

○川路利良

君初メ正之進ト稱ス鹿兒嶋ノ卒族ニ生ル幼ニシテ  
奇拔群兒ニ異ナリシカバ父母甚ダ之ヲ愛シ漢籍及  
ビ擊劍ヲ学バシメシニ其業忽チ進ミケレハ人之ヲ  
重ンジ衆士ニ伍スルニ其側微ヲ侮ル者ナシ其後藩  
主江戸ニ在テ西洋式ノ練兵ヲ藩士ニ学バシメ君ヲ  
擢テ、隊長ト為ス此時君始メテ洋說ヲ聞キ傍ヲ洋  
書ヲ窺フヲ得タリ時ニ薩ノ有名ノ士某幕府ヲ傾覆  
セシト謀ルヲ以テ幽セラル君其名ヲ聞キ常ニ其  
ニ往來シ其說ヲ聽テ數服シ共ニ相親ム後チ君ハ

士族ニ列シ卒族ノ大隊長ト為リ戊辰ノ役新編長岡  
會津等ニ戦ヒ功ヲ以テ藩ノ兵器奉行ト撰ハル  
四年徵サレテ東京府大属ト為リ又権典事ニ進ミ同  
五年遷卒長ニ轉シ又警保助兼大警視ニ任シ此年歐  
米各国ニ至リ警察ノ方法ヲ調査シテ歸リ之ヲ施行  
シテ大ニ効アリ尋テ陸軍少將兼大警視ニ任シ九州  
ニ赴キ八代ヨリ薩軍ノ背後ヲ衝キテ之ヲ破リ後又  
鹿兒島ノ連絡ヲ通シテ歸京ス其功ヲ以テ勲二等ニ  
叙シ旭日重光章ヲ賜ハリタリ

○勝安芳

君旧名ハ義邦通稱ハ麟太郎後チ安房守ト稱シ海舟

近世名家傳 卷七



ト號ス徳川氏ニ事ヘ小士ヨリ旗下ニ奉ケラル天資  
英明自ラ群ヲ出ツ学和漢ニ通ジ兼テ書ヲ善クス壯  
年砲術ヲ学ノ安政二年幕府和蘭ニ托シ造ラシムル  
所ノ蒸氣船ヲ納ル君及ビ矢田堀景蔵等命ヲ受ケテ  
長崎ニ至リ其運用ヲ傳習ス万延元年軍艦咸臨丸ヲ  
運用シテ米國桑港ニ航シテ帰ル是レヲ日本軍艦外  
國ニ航スルノ始メトス幕府再ビ長州征伐ノ師ヲ起  
スヤ君之ヲ諫ムルニ無名ノ師ヲ出スベカラサルヲ  
以テス幕府之ヲ用井ズ及テ君ヲ疑フ其後將軍薨去  
兵ヲ弭メントセシニ長兵退カズ幕府君ノ名定アル  
ヲ以テ廣嶋ニ遣リ談判セシム君長將廣沢與助井上

馨ニ接シテ説ク言甚タ懇口ナリ長兵因テ退ク暴テ  
陸軍總裁ト為ル戊辰ノ変徳川慶喜特々君及ビ大久  
保一翁ヲ召ビ告グルニ密旨ヲ以テス君等勉メテ壯  
士ノ動搖ヲ制シ官軍ノ先鋒品川ニ至リシ時自ラ出  
テ、參謀西郷隆盛ヲ見テ慶喜恭順ノ状ヲ述べ江戸  
攻撃ノ師ヲ止シテヲ懇請ス西郷之ヲ諾シテ江戸城  
ヲ上ラシム君素ヨリ西郷ト相識ル故ニ事成ルヲ得  
テ府民ヲシテ兵難ヲ免レシメタリ榎本ノ品川海ヲ  
脱スルヤ總督君及ビ田安氏ヲ責ム君之ヲ追ヒ軍艦  
ヲ率テ品川ニ返ル此時總督君及ビ田安、大久保ニ江  
戸市中取締ヲ命ゼシガ暫クシテ止ム此時ニ當リ脱

走ノ徒上野山内ニ據テ彰義隊ト号シ輪王寺宮ヲ擁  
シ勢ヲ逞フス君大ニ之ヲ憂ヒ書ヲ宮ニ出シテ云  
ク脱走ノ士山内ニ集リ大ニ寡君恭順ノ意ニ戻ル若  
シ不測ノ変ヲ生セバ徳川氏ニ害アルノミナラズ或  
ハ天下ノ大乱ヲ醸サント脱士等聽カス遂ニ五月十  
五日ノ戦争ニ及ベリ君深ク府下人民ノ塗炭ニ陥ル  
ヲ悲シ大總督ニ歎訴シ田安氏ニ陳スル數回ナリ激  
徒君ノ朝家ニ周旋スルヲ憤リ之ヲ殺サントスル  
三ダヒナリシガ幸ニ皆免ル、ヲ得タリ徳川家達封  
ニ就クニ及ンデ君亦從フテ駿河ニ至ル明治五年朝  
廷君ヲ召シテ海軍大輔ニ任ズ翌年命ヲ奉<sub>テ</sub>進<sub>ル</sub>見

嶋ニ赴キ島津久光ヲ召ス此年征韓論ノ為メニ内閣  
ノ更迭ヲ生シ君伊藤寺嶋ト共ニ参議ト任<sub>シ</sub>海軍  
卿ヲ兼子正四位ニ叙ス外国人内地旅行ヲ請ヒシ時  
獨逸公使ノ云ヒケルハ人ノ其子ヲ愛スル餘リ度ニ  
過キ水練ヲモ為サシメサルハ反テ子ヲ愛スルノ道  
ニアラズト君答テ貴諭誠ニ善シ然レ氏我カ国民ノ  
如キ三歳未滿ノ小兒ヲシテ<sub>オ</sub>酒ガシメハ恐クハ水ニ  
溺レンノミト説破セシニ公使モ其理ニ服セリト云  
フ元老院ノ設ケアル君其ノ議官ニ轉ゼシカ幾クモ  
ナク辞シテ罷ム尔来閑散ニ在テ心ヲ<sub>セ</sub>化学ニ傾ケ自  
ラ樂ム曾テ金十円ヲ商法講習所ニ寄附シ又旧主家

達ヲ勸メテ英國ニ留学セシメタリ

○吉田清成

君ハ鹿兒嶋ノ人弘化元年二十五年ヲ以テ生ル家貧シ

ト虽モ幼少ヨリ漢学ニ志ガシ其業大ニ進ム十八歳

ノ頃初メテ英書ヲ学フ元治元年薩藩少年生十八名

ヲ撰ンテ英國ニ留学セシメシ時君及ヒ森有禮等其

ノ撰ニ當リ英國ニ留ルヲ三年ニシテ倫敦大 학교ノ

学科ニ通シ明治元年同行留學生ト共ニ英國ニ留学

シ廣ク内地ヲ巡覽シテ其ノ政体教育及ヒ製造等ノ

事ニ深ク注意シ大ニ得ル所アリ其年未ニ至

トゲル氏ノ設立シタルニコダコシーノ学校ニ以リ

殆ンドニケ年ヲ經テ在スレヤン氏ノ設立シタルコ

ン子クナカトノ大 학교少年課ニ進級セシカ致

リ英國ニ使スヘキノ命ヲ受ケ諛地ニ止リテ宿志ヲ

伸ブルヲ能ハズ自己ノ勉強ヲ以テ學術ヲ研究ス同

四年帰朝シテ租稅權頭ニ歷任シ又大蔵少輔ニ進ム

同五年理事官トシテ米國ニ至リ公債ヲ募ラントセ

シニ華盛頓在留ノ森有禮大ニ異議ヲ唱ヘケレバ事

遂ニ行ハレズシテ英國ニ航シ七分ノ利子ヲ以テ千

五百万弗ドルノ金ヲ借ルヲ得テ帰朝ス同七年特命全權

公使ニ任セラレテ米國ニ駐劄ス君平素頗ル勉強力

ヲ有シ一諾必ズ速ニ遂ケ事ヲ為スニ勇ミ且ツ活潑

爽快ナリ殊ニ欧米文明国ニ於テ改良セル會計ノ方  
法ヲ調査シ以テ日本ニ採用ス以前同学ノ朋友ニシ  
テ今政府ノ顯官タル者少ナカラス伊藤博文森有禮  
ノ如キ是ナリ君静岡ノ人某氏ヲ娶ル性温雅ニシテ  
亦英語ニ通ズ

○横山正太郎

君ハ鹿兒嶋ノ人本姓ハ森氏有禮ノ兄ナリ横山氏ノ  
養子ト為ル人ト為忠実ニシテ能ク親ニ事ヘ藩主ニ  
侍スルト十餘年過ラ諫メ弊ヲ革ムル一ニシテ足ラ  
ス英艦鹿兒島ヲ襲ヒシ時人家多ク兵火ニ罹  
藩主戸毎ニ金ヲ与ヘテ之ヲ救フ君故人ノ貧苦ナル

者ヲ恤レミ一夜其賜金ヲ投シテ去リシニ其故ヲ知  
ル者ナカリシガ君ノ死後親戚朋友其日記ヲ見テ始  
メテ君ノ所為タルヲ知レリ君薩藩公子ノ近侍タリ  
シカ其ノ深宮ニ成長シテ下情ニ疎キヲ恐レ切ニ遊  
学ヲ勸メテ自ラ隨行セシカ故有テ公子ヲ召還シ君  
亦從フテ藩ニ歸リテ其職ヲ奪ハル君又請テ東京ニ  
遊ヒ田口文造ノ塾ニ入りシカ自ラ思ラク当時官吏  
ノ遊蕩驕奢ナル矯正セザルベカラス尋常諫議スル  
モ益ナシ死ヲ以テ諫ムルニ如カズト乃チ時弊十條  
ヲ陳シ且ツ征韓ノ非ヲ論ジ其書ヲ持シテ集議院ニ  
至リ之ヲ門扉ニ挿ミ退テ津藩邸門前ニ屠腹ス時ニ

近世名家傳 卷上

十一

明治三年七月廿七日曉ナリ門吏驚キ之ヲ薩邸ニ告  
ク邸吏來テ邸ニ入レシカ未ダ息モ絶ヘザレバ人ヲ  
遣テ集議院ニ問ハシムルニ彼ノ封書ハ既ニ政府ニ  
上リシトノ事ナレバ其趣ヲ告ゲシニ君安心ノ体ニ  
テ瞑目セリ享年二十八歳政府之ヲ愍レシ祭案料百  
圓ヲ賜フ而シテ時弊モ亦稍ク改マルト云フ西郷隆  
盛其碑文ヲ撰シ深ク其死ヲ惜メリ

○谷干城タケキ

君ハ土佐ノ人旧名ハ守部谷重遠カ五世ノ孫ナリ家  
世々儒ヲ以テ業トス君人ト為リ深沈豪毅ニシテ幼  
年ノ頃ヨリ家庭ニ學ビ後チ江戸ニ遊ヒ安井息軒ノ

門ニ入リシガ生徒ノ中ニ在テ自ラ衆ニ異ナリ敢テ  
人ニ倚テ事ヲ成サズ安井殊ニ君ヲ愛シ我子ノ如ク  
教育シケルニゾ君モ亦安井ニ事フルヲ父ノ如クシ  
始終変ゼス其後藩ノ小監察ト為リテ諸州ヲ遊歴シ  
各藩ノ動靜ヲ本藩ノ執政ニ報シ其功少ナカラズ櫻  
田ノ變アリシ翌年君容堂ニ從テ江戸ニ在リシガ彦  
根ノ藩士怨ミテ水戸ニ懐ク者容易ナラヌ企アルヲ  
聞テ容堂大ニ憂ヒ竊ニ君及ビ林龜吉曾和慎ハノ三  
人ヲ彦根ニ遣リテ禍ヲ未發ニ防カントス三人苦辛  
シテ彦根ノ藩老ニ面會シ利害ヲ説キ其擧ノ非ナル  
ヲ述ベシニ藩老モ大ニ其言ニ服シ激徒數十人ヲ罰

シ事遂ニ止ムヲ得タリ容堂曾テ君ヲシテ支那ニ遊  
バシム君洋人ノ居留地ヲ歴觀シテ其文明ノ風ヲ慕  
ヒ是ヨリ大ニ意見ヲ改メタリ戊辰ノ役君大軍監ト  
為リ甲州野州奥州ニ轉戦シ東北平定ノ後藩ヨリ賞  
典祿若干ヲ受ク幾クモナク朝廷君ヲ召シテ陸軍少  
將ニ任シ熊本鎮臺ノ司令長官タラシム佐賀ノ乱兵  
ヲ出ス僅ニ一大隊ノミ縣令安岡氏ニ向テ僕鎮臺兵  
ヲ率井テ佐賀ニ赴キ賊ヲ討撃セバ一挙シテ平定ス  
ベシト虽モ今此ノ城ヲ捨テ、遠ク出ル時ハ熊本ノ  
士族忽チ起リテ城ヲ奪フハ必定ナリ九州ノ治乱ハ  
此一城ニ在リト断言セリ征臺ノ役君赤松海軍少將

ト共ニ參軍トシテ臺灣ニ至リテ功アリ明治九年熊  
本神風連ノ種田少將ヲ害スルヤ君再ビ熊本鎮臺ノ  
司令長官ト為リシガ鹿児島叛徒ノ起ル君固ク籠城  
シ五十餘日ノ間防戦シ遂ニ敵ヲシテ志ヲ得セシメ  
ザリシハ君ノ戰略其ノ固ニ中リタレバナリ凱旋ノ  
後勲二等ニ叙シ旭日重光章ヲ賜フ妻国沢氏頗ル才  
氣アリ薩軍熊本ニ迫リシ時君ニ從テ城中ニ入り始  
終艱苦ヲ共ニセリ君性義ヲ好ミ能ク人ノ窮乏ヲ助  
ケ其東京ニ在ルヤ書生ヲ養フ又厚ク師ノ安井ヲ遇  
シ其家計一ニ君ノ辨スル所ナリ高知ノ人概チ板垣  
後藤ヲ仰テ之ニ倚頼スト虽モ君巍然トシテ獨立ス

近世名家傳

人皆其氣象ヲ高シトス

○田中不二磨

君ハ尾張ノ人旧名ハ国之輔天資温良国学ヲ善クス  
藩主徳川慶勝ニ任用セラル慶應三年十二月西郷大  
久保後藤ノ諸氏ト共ニ徴サレテ參與ト為ル徳川慶  
喜ヲ入朝セシムルヤ尾越兩藩主大坂ニ往テ朝旨ヲ  
傳フ君之ニ從フ既ニシテ徳川氏ノ先驅京ニ入ラン  
トス君驚津宣光(毅堂)ト幕士ニ接シ其兵ヲ大坂ニ退  
ケザレハ少隊入朝ノ義ニ妨害アリト反覆之ヲ論ズ  
然レモ幕士危疑シテ聽カズ遂ニ開戦トハナリ又此  
時ニ當リテ尾張ノ士黨ヲ分テ宗家ヲ援クルノ議ヲ

起シケレハ慶勝之ヲ憂ヒ君及ビ驚津等ト謀テ其ノ  
首謀ノ重臣十五人ニ死ヲ賜ヒ十七人ヲ禁錮ス明治  
元年三月君辦事ヲ兼又曾テ御前ニ侍シテ經書ヲ講  
ズ大坂行幸ノ時駕ニ從フ其後維新ノ功ヲ賞シ金千  
兩ヲ賜ヒ文部大丞ニ歷任シ又三等出仕ニ大輔ニ進  
ム東京女子師範学校ノ設ケアル皇后之ヲ嘉ミシ君  
ヲ宮中ニ召シ内庫金五千圓ヲ加資セラル、ノ親諭  
アリ同九年米國博覧會ニ赴キ帶留數月ニシテ帰朝  
ス同十一年議官ヲ兼ヌ

○副島種臣

君ハ佐賀ノ人旧名ハ二郎性剛毅漢学ヲ善クス明治

元年三月徵サレテ參與兼制度事務局判事ト為リ同  
二年參議ニ任ゼラルル同四年魯国ホシエツト濟ニ至  
リ樺太經界ヲ談判ス歸朝ノ後外務卿ニ轉ス同五年  
秘魯国船<sup>ペリウ</sup>マリヤルズ号支那ノ賣奴ヲ載セ横濱ニ至  
ル君命ジテ之ヲ解キ其本国ニ歸ラシム同六年特命  
全權大使トシテ支那ニ往ク從來支那帝ハ外国公使  
ニ謁見ヲ許サバリシガ君之ヲ論諭シテ始メテ謁見  
シタリ此時支那ノ一官吏君ヲ詰テ卿日本ノ大臣ニ  
ナガラ何ソ洋人ノ風俗ヲ摸シテ來ルヤト問ヒ  
シニ君ハ此瑣細ハ事現今思考ヲ費スニ足ラズト答  
ヘタリ中外人君ノ學識ト果斷トヲ敬慕ス歸朝ノ後

再ビ參議ト為リ西郷等ト征韓論ヲ主張シテ議合ハ  
ズ遂ニ冠ヲ挂テ云ル君能ク事務ニ熟達シ最モ外交  
ニ堪フ其職ヲ去ルヤ識者為メニ歎惜ス征韓ノ  
議未タ全ク跡ヲ絶タズ人心洶々タリ君乃チ板垣後  
藤等ト連署シテ民撰議院ヲ立シテ建白ス時ニ加  
藤弘之其議ヲ駁シ互ニ書ヲ作テ辨論ス天下ノ人士  
民権ノ說ヲ唱フルニ至リシハ此論ノ影響ニ因ル居  
多ナリ其後立憲政体起立ノ詔アルニ際シ君ヲシテ  
再ビ官ニ就カシメントセシニ君之ヲ辞ス初メ君ノ  
支那ニ赴クヤ李鴻章ハ君ノ人品ノ高尚ナルヲ歎賞  
シ其交誼甚ダ厚ク歸朝ノ後モ屢々書ヲ贈答シテ好



意ヲ通ゼリ同九年君再支那ニ航シ各地ヲ遊歴ス時  
ニ李鴻章ハ君ヲ支那政府へ推薦セシトノ説アリ支  
那ノ学者君ヲ敬スル者多ク来リテ書物上ノ事ヲ質  
問スルニ答辨流ルカ如クナレバ何レモ感服セシ  
トゾ又一日總理衙門ヨリ君ヲ招キテ饗應セシニ君  
ハ唯一僕ヲ連レテ赴キケレバ門吏ハ輕々シキ体ヲ  
怪シミテ入レザリシガ官吏来リテ恭ク迎へ入レ語  
次其ノ輕装ヲ詰リケレハ君ノ云ク我邦モ幕府ノ頃  
ハ退ノ者モ數多ノ役者ヲ召連レ外見ヲ飾リシガ  
今ヤ自由ヲ尚セ世トナリ何事モ隨意ナリ今種臣ハ  
日本ノ民マタ前日ノ全權大使ニアラザレハ斯ク

○津田仙

天保八年二千四百年九十七年ヲ以テ下總佐倉ニ生ル初メ  
專ラ武術ヲ事トシ後東京ニ遊ヒ蘭書ヲ学ブ慶應三  
年幕命ヲ奉シテ福沢氏等ト共ニ米國ニ航ス維新ノ  
後開拓使大藏省等ニ出仕シ明治六年澳國ノ博覽會  
ニ赴キ万国審査官ノ一員ニ撰バレ此會ニ於テ名譽  
賞状及ビ有功賞牌ヲ得タリ君澳國ニ在テ殖産ノ事  
務ニ注目シ農学者ホーイブレック氏ニ就テ其説ヲ  
聞キ大ニ得ル所アリ帰朝ノ後媒助、偃曲、氣筒ノ方法  
ヲ我國ニ傳へ又農業三事ト題セル書ヲ著ス初メ君

ノ米國ニ在ルヤニユトヨクニ於テ某氏ノ骨相學  
ニ通ズルヲ聞キ往テ自ラ其檢察ヲ受ケシガ其相ス  
ル所皆適中ス君是ヨリ意ヲ骨相學ニ傾ク君又歐米  
諸國ヲ歴觀シ頗ル宗教ニ感スル所アリ遂ニ深ク西  
教ヲ信ズ君常ニ富國ノ要務ハ農業ヲ盛ニスルニ  
在ルヲ主張シ東京ニ學農社ヲ建テ又農業雜誌ヲ發  
行シ内國勸業博覽會ニ於テ龍紋賞牌ヲ受ク君ノ名  
全國ニ聞ヘ地方有志ノ者東京ニ來リ君ノ門ヲ叩ク  
者亦ナカラス蓋シ本邦農事ノ進歩ニ於ケル君與ツ  
テ功アリ君博ク天下ノ名士ニ交リ明六社及ビ樂善  
會等ニ屬ス君性大度ニシテ能ク窮民ヲ惠ミ貧者

大ニ進ムト云フ  
成島柳北

君ハ天保八年二十七年ヲ以テ生ル小字ハ甲子太郎  
後ニ大隅守ト稱ス世々幕府ニ仕ヘ儒ヲ以テ著ハル  
年十八ニシテ將軍ノ侍讀ト為リ德川氏実録ノ編輯  
ヲ督ス當時ノ内閣振ハサルヲ以テ之ヲ矯ントセシ  
ガ力及バズ慷慨止ムベカラズ遂ニ痛飲縱遊シテ以  
テ其ノ抑鬱ノ氣ヲ泄ラス或ハ筆墨ヲ假リテ以テ其  
ノ不平ヲ鳴ス嘗テ狂詩ヲ賦シテ權官ノ評議臭ニ於ニ  
大府威光輕以塵ノ句アリ幕府ノ權官之ヲ視テ大ニ

怒リ忽チ其職ヲ免シ五十日ノ謹慎ヲ命ス君此ヨリ  
門ヲ閉チテ洋学ヲ修ル一三年ナリ門生其洋学ニ就  
クテ悦バズ盡ク背キ去リ或ハ君ヲ殺サント欲スル  
者アルニ至ル慶應元年幕府改革ヲ行フニ當リ君ヲ  
擢デ、騎兵頭ト為ス君兵制ヲ改メ洋式ニ倣フベキ  
ノ議ヲ主張セシニ幕府之ニ從ヒ君ヲシテ佛式練兵  
傳習ノ事ヲ督セシム君時運ノ変アラン一ヲ慮リ專  
ラ武備ヲ事トシ筆硯ヲ抛ツ一三年ナリ然レモ幕府  
ノ路百事意ノ如クナラザルヲ歎シ遂ニ職ヲ辞セ  
シガ幾クモナリ又外國奉行ト為ル幕府幣蔵ノ  
會計總裁ト為シ大

保...ト共ニ金穀ノ事ヲ掌ラシム慶喜ノ罪ヲ朝  
廷ニ獲ルヤ上野...謹慎セントス君云ク上野ニ屏居  
ハ不可ナリ單行シテ京都ニ至リ罪ヲ謝スベシ  
臣等二三名扈從セン是レ伊達政宗ガ礎柱ヲ荷フテ  
罪ヲ秀吉ニ謝スルノ策ナリ然ル時ハ東國ノ人心必  
ス動揺スル一ナカラント諍フテ深更ニ至リシカド  
モ慶喜聽カズ官軍將ニ江戸ニ入ラントスル時城中  
會議シ或ハ慶喜ヲシテ人民ノ為メニ自ラ謀ル所ア  
ラシメントス衆皆黙ス君憤然トシテ云ク諸君ハ是  
レ主君ノ鴻恩ヲ荷フ者ニ非スヤ今危急ニ臨ミ主君  
ヲ殺シテ罪ヲ謝スルガ如キ諸君忍ンテ之ヲ為スモ

近世名家傳

大隅ハ決シテ從フ能ハスト衆皆之ニ服ス此ノ後復  
タ幕廷ニ出テス請フテ民籍ニ入ル此ヨリ東西ニ遊  
ヒ終ニ歐米ニ航ス曾テ左院出仕ヲ命セラレシカ辭  
シテ就カズ君朝野新聞社ノ請ヒニ應シテ局長トナ  
リシニ旌旗ノ色一変シ癸兌ノ紙數頓ニ増加セリ其  
後チ讒謗律ニ觸レテ獄ニ幽セララル、一數月ニシテ  
出ヅ著ス所ノ柳橋新誌等アリ又京猫一斑ヲ出版セ  
ン、一ヲ請ヒシニ准許ヲ得ズ因テ書ヲ以テ田中文部  
大臣ト論議シタルヲアリ又近世ノ歴史ヲ修ムルノ  
意アリ讒謗律ニ觸シ其心得方ヲ内務省ニ問ヒシ  
之ガ答辨ヲ為スノ責任ヲ有セズトテ之ヲ

鳴ノ乱君西京ニ赴キ彼地ノ景況ヲ本社ニ  
報ジ暫クシテハ君詩ニエニシテ善ク文ヲ属シ風  
流以テ自ラ娛シム

○中根雪江

君文化四年二十七年百ヲ以テ生ル初メ勤負ト稱ス越  
前ノ人世々本藩ニ仕ヘテ七百石ヲ食ム幼ヨリ聰明  
ニシテ文学ニ志ス壯年ニシテ用人ニ奉ラレ又中老  
ニ進ム後チ平田厚胤ノ門ニ入りテ国学ヲ習ヒ藩士  
ヲ勸メテ勤王ノ志ヲ励マシ水藩藤田虎之助、戸田銀  
次郎、安嶋帶刀及ヒ薩藩有志ノ士ト交ル米人渡来ノ  
始メ諸藩皆チ攘夷ヲ唱ヘシカ君獨リ意見ヲ異ニシ

近世名家傳 卷上

和親貿易ヲ許スベキヲ言ヒ日本皇帝ヨリ米國大統領ニ答フルノ書ニ擬スル一篇ヲ草シ之ヲ藩主松平慶永(春嶽)ニ献ズ慶永之ヲ閱シ終リ今日此ノ如キノ説ヲ唱ヘテ世ノ嫌疑ヲ受クル勿カレト云ヒシガ後チニ至テ其時勢ヲ洞見セルヲ稱セリ維新ノ初徴サレテ參與ト為リ内國事務掛ヲ兼子シカ數月ノ後職ヲ免セラレ褒賞ヲ賜ハリ尋テ賞典祿四百石ヲ賜ハリ越前ニ退隱セリ明治十年西京ニ赴キシニ行在所ニ及サレテ謁ヲ賜ヒ維新ノ際國事ニ尽力セルヲ賞シ金七十兩羽二匹一匹ヲ賜ハル此年病ヲ以テ歿ス

新八

村田ハ鹿兒嶋ノ歌名ヲ常光トイフ才畧ヲ以テ稱セ幕府ノ末勤王ニ名アル岡藩士小河弥右衛門(一敏)ノ薩州ニ来リシ時薩ノ家老小松帶カハ村田及ビ有馬新七、田中謙助ノ三士ヲ遣リテ之ニ接セシメ共ニ時務ヲ談ズ薩長カラ合セテ幕府ヲ倒サントスルヤ村田ハ黒田清隆ト長州ニ往來シテ之ヲ議セリ維新ノ後宮内大丞ト為リ大使欧米各國へ派遣ノ時之ニ隨行シ大使帰朝スルニ及ンテ自カラ請フテ歐洲ニ留リシガ西郷ガ政府ト意見ノ合ハザルヨリ鹿兒島ニ歸リタルヲ横濱洋字新聞ノ達セシニテ知り其

奉動ノ如何ヲ憂ヒテ帰朝セリ時ニ佐賀ノ乱アリテ九州モ何トナク穂カナラス村田ハ急ニ鹿児島ニ歸リシカ西郷等兵ヲ起スニ及ンデ之ニ與ミシ一軍ノ將トナリ官軍ト各所ニ抗戦シ遂ニ西郷等ト城山ニ戦死ス村田ハ頗ル事理ニ通シ世態ヲ辨知ス一旦交リシ人トハ假令ヒ平生ノ議論合ハザルモ親睦ヲ全フシテ始終変ゼザリシト云フ

○井上馨ノホレ

君ハ長州ノ人初メ聞多ト称ス敏捷雄辯ヲ以テ著ハル幕府ノ長州ヲ攻撃セシ時君大村益次郎ト兵千餘人ヲ率テ幕兵ヲ敗リ石見ヲ取ル維新ノ際薩

兵ト共ニ福山城ヲ徇フ明治元年正月廣沢兵助ト共ニ參與ト為リ外務事務掛ヲ兼子尋テ長崎府判事ト為ル其後民部大丞ニ民部大輔ニ大藏大輔ニ登遷ス廢藩置縣ノ際非常ノ劇務ヲ整理シ郡縣ノ制度ヲシテ其緒ニ就カシメシハ君ノ功多キニ居ル時ニ令ヲ下シ旧藩々ニテ製造セシ大砲ヲ悉皆引上ゲタルガ其後九州騷乱ノ節人始メテ其處置ノ宜キヲ得タルヲ知リタリトソ同六年淡沢栄一ト共ニ上書シニ財政ノ不當ヲ論ジ政理民力相敵セザルヲ言ヒ其職ヲ辞ス其書ヲ新聞紙上ニ掲載セシ華族ノ鉄道ヲ新築セント議スルヤ君ハ鉄道ヲ新築スルノ既成鉄道ヲ

買フニ若カザルヲ論シ利害得失ヲ説ク一甚タ適切  
ナリシカハ華族等其言ニ服シ之ニ従フ朝鮮問罪ノ  
議起ルヤ議官ニ任ゼラレ特命副全權辦大臣トシ  
テ彼国ニ至リ使命ヲ全フシテ帰ル其賞トシテ千五  
百圓ヲ賜フ是ヨリ先キ先収會社ノ社負タリシガ使  
命ヲ受クルノ際其ノ組合ヲ離ル又大蔵省在職中尾  
孫沢銅山ノ訴訟ニ被告ト為リシガ君ハ三従ヲ以テ  
論セラレ贖金三十圓ヲ科セラレタリ君既ニ使命畢  
テ後會計事務取調トシテ英國ニ航ス蓋シ政府ニ内  
約シタル所アルバナリ出發ノ前一タビ故郷ニ歸リ  
姉妹ニ別ヲ告ゲ多クノ公債証書ヲ與ヘ又維新ノ役

君ニ屬シテ戰死シタル者ノ家族ヲ扶助セシガ同ジ  
公債証書ヲ與フ同十一年歸朝參議兼工部卿トナル

○大島圭介

君名ハ純彰徳川氏ノ臣ナリ沈勇ニシテ器畧アリ兵  
ヲ佛人ニ學ヒ大ニ得ル所アリ歩兵練法ヲ著ハス文  
久元年ニ十一年百鉛版ヲ以テ築城典型ヲ印行ス是レ  
ヲ鉛製活版ノ始メトス各藩西洋ノ兵法ヲ演習スル  
皆君ノ著書ニ據レリト云フ戊辰ノ變君其黨凡千六  
百人ヲ率井テ下総市川ニ脱走シ又野州ニ至リ結城  
ヲ陥レ進ンテ宇都宮ヲ取テ之ニ據ル東軍大ニ振フ  
君善ク兵ヲ用ヒ其ノ率ウル所ノ兵皆塾練シ屢々官

軍ヲ悩シケレハ官軍最モ君ヲ畏ル然レモ官軍亦盛  
ンニ攻撃シ遂ニ宇都宮ヲ復ス君板倉父子ヲ擁シテ  
日光ニ走リ又會津ニ仙臺ニ奔ル奥羽諸藩降ルニ及  
ビ會々榎本氏脱艦ヲ率ヰテ來ル乃チ之ニ投ジ共ニ  
蝦夷地ニ至リ官軍ト抗戦シ其勢ヒ盛ナルニ当リ  
衆議君ヲ以テ陸軍奉行ト為ス明治二年五月力尽キ  
榎本等ト共ニ降伏シ東京ニ護送セラレ獄中ニ在ル  
一二年餘同五年ニ至テ赦サル君獄中ニ在テ讀書ニ  
勉励シ永井玄蕃ニ蘭書ヲ教フ獄ヲ出テ、十餘日永  
井ト共ニ少議官ニ任セラレ其翌日開拓使五等出仕  
ニ補セラレ吉田大蔵少輔ノ米、英ニ至リ國債ヲ募ル  
ヤ君大蔵少丞ヲ兼子之ニ隨行ス同八年工部省四等  
出仕ニ補セラレ命ヲ受ケテ澳國公使ト共ニ暹羅ニ  
往キ國王ニ謁ス帰國ノ後暹羅紀行ヲ著ハス其後工  
部大書記官ニ任セラレ工部局長タリ内國勸業博覽  
會開設ノ時其審査官ニ撰ハレタリ

○大久保利通

君ハ鹿兒嶋ノ人旧名ヲ市蔵ト稱ス文政十二年四百  
九十年ヲ以テ生ル幼ニシテ個儻不羈群兒ニ卓越ス長  
スルニ及ンテ剛毅果決学和漢ニ涉ル幕府ノ末京都  
ニ往來シ朝臣ノ家ニ出入シ各藩ノ有志ト時事ヲ談  
シ又土州人坂本龍馬ノ說ヲ容レ長州ト和親シ君西



郷ト共ニ長州ニ至リ謀議ヲ通ジテ京都ニ入ル維新ノ初メ君徴サレテ參與ト為リ内国事務掛ヲ兼ヌ既ニシテ帝都ヲ大坂ニ遷スベキノ議ヲ上リ從來帝王尊大ニ過グルノ弊ヲ論シ簡易輕便ヲ主トスベキヲ言フ朝議之ヲ嘉納シ遂ニ大坂ニ行幸アリ後チ東京ニ遷都アリシハ此議ニ基ツクト云フ明治二年恭議ニ任セラレ賞典祿千八百石ヲ賜ハリ從三位ニ叙ス同三年岩倉氏ニ隨テ鹿児島ニ赴キ嶋津氏ヲシテ上京センム又西郷、水戸ト共ニ高知ニ往キ板垣氏ヲ伴フテ歸ル廢藩ノ議茲ニ成ル尋テ頭官ノ任免アリ君大藏卿ニ轉ズ特命全權大使ノ歐米ニ派出スル君、水

戸、伊藤山口之ガ副使タリ同五年一タビ歸朝シ復々歐洲ニ航シ同六年歸朝シ再ビ恭議ニ任ズ時ニ征韓ノ議アリ君等之ヲ非トシ遂ニ内閣ノ更迭ヲ生シ西郷等退職ス既ニシテ大ニ内治ヲ皇張セントテ内務省ヲ置キ君ソノ卿ヲ兼ヌ同七年佐賀ノ乱君兵ヲ率テ出張シ之ヲ征ス九州ノ士民方向ヲ定メ敢テ敵ニ與セガリシハ其出征ノ速ナルニ由レリ忽チニシテ叛徒ヲ破リ巨魁江藤等ヲ死刑ニ處ス君佐賀ヨリ歸ルニ際シ臺灣征討ノ事起ル君長崎ニ至リ蕃地ノ處分ヲ議ス次テ支那ト葛藤ヲ生スルニ及ヒ君全權辦理大臣トシテ同國ニ赴キ談判數回ノ後彼ノ政府ヲ

シテ償金ヲ出サシメテ歸朝ス大坂會議ノ時君亦之  
ニ與カリ水戸板垣伊藤ト共ニ政體取調ノ事ヲ任ズ  
同九年四月車駕其ノ邸ニ臨ム尋テ奥羽巡幸ノ先發  
トシテ巡回シ月餘ニシテ歸京ス鹿兒嶋ノ警報アル  
ニ及ンテ君西京ニ赴キ征討ノ機務ニ忝ス帝西京ヨ  
リ還幸アルニ當テ君亦歸京シ勲一等ニ叙シ旭日大  
綬章ヲ賜ハリ又從三位ヨリ正三位ニ昇ル同十一年  
五月十四日紀尾井町ニ於テ島田一郎等ノ為ニ殺サル  
右大臣正二位ヲ贈リ其嫡子ヲ水戸氏ト共ニ華族トス  
○大隈重信  
君ハ佐賀ノ人初メ八太郎ト稱ス藩主鍋嶋氏ニ仕フ

維新ノ初メ徵サレテ長崎裁判所ノ忝謀ト為リ尋テ  
忝與兼外國事務局判事ト為リ横濱ニ在留ス明治二  
年會計官副知事ニ轉ス贖金ノ行ハル、ヤ外國人其  
苦情ヲ政府ニ訴ヘケレバ君其ノ取調トシテ大坂ニ  
赴ク其後大藏大輔ニ任セラレ同三年忝議ニ進ム鉄  
道建築ノ事タル其費金ヲ外國ニ募ルヲ以テ議者多  
クハ之ヲ非トセシカ君其事ヲ擔當シ能ク衆議ヲ排  
シ遂ニ成功ニ及ビシカバ政府ハ之ヲ賞シ伊藤博文  
ト各剣一口ヲ賜フ澳國博覽會ノ奉アル君其事務總  
裁タリ同六年井上澂沢ニ氏ノ上書シテ財政ヲ論ゼ  
シ時政府ハ之ヲ批覆シテ却クト虽モ主職ノ上書ナ

ルヲ以テ中外之ヲ確信シ頗ル物議ニ渉ル君乃チ大  
蔵省事務総裁トシテ更ニ會計ヲ調理シ歳入出及ヒ  
国債ノ表ヲ作りテ之ヲ公布ス依テ稍ヤ物議ヲ鎮ム  
ルヲ得タリ是ヨリ毎年會計豫算表ヲ公ニス此年大  
蔵卿ヲ兼ヌ征臺ノ議アル君其方畧ヲ按シ遂ニ蕃地  
事務局長官トシテ長崎ニ至リ西郷都督ト諸事ヲ議  
ス其後鹿兒島征討ノ事起リ其費額莫大ナレバ君百  
方苦慮シ能ク其方法ヲ尽セリ叛徒平定ノ後大久保  
諸氏ト共ニ勲一等ニ叙シ旭日大綬章ヲ賜フ明治十  
一年四月車駕君ガ飯田町ノ新邸ニ臨ム我國會計困  
難ノ時ニ當リ多年之ヲ料理シ毫モ錯誤ヲ生ゼシメ

ザルハ君ノカナリ

○大山綱良

大山ハ文政八年二十四年ヲ以テ生ル初メ格之助ト  
稱ス鹿兒嶋ノ士ナリ禄三十六石ヲ食ム初メ茶道ヲ  
勤メタルガ武ヲ好ミ擊劍ニ於テハ鹿兒嶋ニ於テ第  
一ト呼ハル又居合ノ如キハ檐ニ滴ル雨垂ヲ切再ビ  
雨垂ノ下ラザル中ニ刀ヲ鞘ニ收ムル程ノ妙手ナリ  
是ヲ以テ當時ノ茶道ハ皆大山ノ風ヲ学ビ其本職ヲ  
打捨テ、專ラ武道ニ志シ追々還俗スルニ至レリ文  
久二年島津久光、上京スル浪士之ニ倚テ事ヲ成シ  
ト欲ス島津氏其過激ヲ憂ヒ大山等ヲ遣テ説諭セシ

ムレ正聴カズシテ暴挙ニ及ビシカバ盡ク暴徒ヲ打  
果シタリ戊辰ノ役奥羽征討ノ恭謀トシテ秋田ニ至  
リ軍議ヲ画ス時ニ仙臺ノ使者来テ秋田ノ隊將ニ謂  
テ曰ク總督ハ京都ニ歸ラシメ薩長ノ士ハ逐フベシ  
ト大山之ヲ聞テ大ニ怒リ總督ニ謂テ遂ニ使者十人  
ヲ斬テ軍門ニ梟ス是ニ於秋田一藩志ヲ堅フス此時  
兵寡ナク援軍ナク甚ダ危カリシガ既ニシテ薩長等  
ノ大軍至リケレバ大山ヲ始メテ安堵セリト云フ軍  
功ヲ以テ賞典祿ハ百石ヲ賜フ其後鹿兒島縣恭事ト  
為リ又其令ニ進山明治八年地方官會議ノ時民會未  
ダ開クベカラズ之ヲ開カバ共和政治ノ惡弊ニ陥リ

人民政府ヲ論議スルニ至ルベシトノ建白ヲ讀ミ上  
タリ金祿公債証書ノ制出ルヤ鹿兒島ノ士族ハ頗ル  
物議ヲ生ジケレバ大山上京シテ談縣士祿ノ他ニ異  
ナルヲ陳シ遂ニ特別ノ處分ヲ許サル大山ハ素ヨリ  
西郷隆盛ノ腹心ナリ曾テ今泉ト云ヘル所ヲ巡回セ  
シ時大ニ士族ヲ集メテ盛宴ヲ張リ歌ヲ口吟シテ曰  
ク諸君も小盡しくして守らなむ薩広あがたの何ら  
ん限りハト折カテ大盃ヲ飲乾シ座中ヲキツト見渡  
シテ云ヒケルハ諸君ハ是マデノ勇氣ヲ落サス能ク  
私学校ノ趣意ヲ体認セラレヨ余ハ孰レ一度ハ切テ  
出子ハ成ラヌト思フナリ武ノ老翁

西郷ハ武村ニ住  
居ス故ニ斯クハ

ナリフモ必ス余ト同意ナルベシト座中ノ人々何レモ  
之ニ服シ不同意ノ者唯一人ノミナリシトゾ西郷等  
愈々出陣スルニ當テ政府及ヒ府縣鎮臺ニ通知シ或  
ハ金穀ヲ周旋スル等總テ其ノ叛意ヲ助ケシガ遂ニ  
政府ノ疑察スル所トナリ勅使鹿兒島へ下向ノ時之  
ヲ伴フテ神戸ニ至テ官位ヲ奪ヒ東京ニ護送シ臨時  
裁判所ニ於テ審問アリシガ又九州臨時裁判所ニ送  
ラレ長崎ニ於テ遂ニ斬罪ニ処セラル時ニ明治十年  
九月三十日ニシテ行年五十二歳ナリ

○大木喬任タカトシ

君ハ佐賀ノ人旧名ハ民平天資沈黙漢学ヲ善クス嘗

テ江藤新平ト友タリ世ノ人材ヲ言フ者大木民平江  
藤新平青木恭平ヲ呼ビテ佐賀ノ三平ト稱セリ明治  
元年徴サレテ参興兼外国事務局判事ト為リ後チ軍  
務官判事ニ轉シ辨事坂田潔高鍋ノ人後諸潔ト改ムト共ニ公議  
所議長ノ事務ヲ兼理セシガ幾クモ無クシテ罷メ又  
鮫島森神田ト共ニ議事体裁取調掛ヲ命セラレ又東  
京府知事ヲ兼ヌ同三年民部大輔ト為リ又卿ニ進ム  
文部省ノ創立アリシハ君ノ建議ニ依ルト云フ同五  
年文部卿兼教部卿ト為リ同六年後藤及ヒ江藤ト共  
ニ参議ニ任シ尋テ司法卿ヲ兼ヌ同九年熊本山口暴  
徒ノ起ル君九州ニ出張シ其ノ処分ヲ督ス同十年大

久保大隈等ト共ニ勲一等ニ叙シ旭日大綬章ヲ賜フ  
君公務ノ餘暇書ヲ讀シテ倦マズ或ハ深更ニ至ル  
アリ和漢ノ書ハ云フニ及バス西洋ノ翻譯書類マデ  
モ涉獵セザルナシト云フ

○黒田清隆キョウカ

君ハ鹿兒嶋ノ人旧名ハ了介人ト為リ豪邁朴實幕府  
ノ末大久保氏等ト国事ニ盡カシ維新ノ役忝謀トシ  
テ東北ニ出征シ又箱館脱走ノ徒ヲ討滅ス榎本等ヲ  
死刑ニ処セサリシハ君ノ力與カルト云フ君軍功ヲ  
以テ賞典祿七百石ヲ賜ハリ外務大丞ト為リ又開拓  
次官ニ遷リ明治三年樺太ニ駐在ス翌年英國ヨリ米

國ヲ巡リゼ子ラルケプロンヲ雇フノ約ヲ為シテ歸  
ル此時君米國婦女ノ幸福ナル景況ヲ視テ大ニ感ズ  
ル所アリ其原由ハ彼國女教ノ盛シナルニ在ルヲ聞  
キ歸朝ノ後政府ニ其趣意ヲ述ベテ女子數名ヲ米國  
ニ留学セシメタリ征韓論ノ盛シナル頃魯國ノ關係  
切迫ナルヲ説キ北海道ニ鎮臺ヲ置カン<sub>ト</sub>ヲ言ヒシ  
ガ同七年陸軍中將ニ任セラレ北海道屯田憲兵事務  
總理ヲ命セラレ尋テ忝議ヲ兼子開拓長官ニ進ム初  
メ戊辰己巳ノ乱早ク平定セリト虽モ国力充實ナラ  
ザルヲ以テ屢バ上書シテ邦基ヲ確定シ内政ヲ整理  
シ專ラ育材ト蓄財トニ注意シテ速ニ富強ノ実効ヲ

奏セシテ議ス支那ト葛藤ヲ生ズルニ及ビシカバ  
軍費ノ欠乏ヲ憂ヒ開拓使定額金ノ内ヨリ拾万圓ヲ  
還納シ且ツ其ノ月給モ當分四分ノ三ヲ献セシテ  
請ヒシニ政府ハ特ニ使費ノ還納ヲ許シ月給ノ献納  
ヲ許サズ樺太交換ノ如キハ君ノ夙ニ癸議スル所ナ  
リ其事畢テ魯国ヨリ勲章ヲ受ク朝鮮問罪ノ議起ル  
全權辨理大臣トシテ井上氏ト共ニ彼国ニ至リ使命  
ヲ全フシテ歸ル其賞トシテ金二千圓ヲ賜フ西南ノ  
乱君西京ニ赴キ勅使ト共ニ鹿児島ニ至リ彈藥等ヲ  
処分シ薩軍ノ形勢ヲ察シ其背後ヲ衝クノ策ヲ献シ  
ケレハ遂ニ恭軍ヲ命セラレハ代ヨリ進ミ熊本ニ連

絡ヲ通シタル後恭軍ヲ辞シテ歸京ス功ヲ以テ勲一  
等ニ叙シ旭日大綬章ヲ賜リタリ

○栗本鋤雲

君ハ文政四年二十一年ヲ以テ生ル幕医喜多村槐園  
ノ子ナリ宛庵ト号ス後チ栗本氏ヲ繼グ君少ニシテ  
多病吐血ヲ患ヒケレバ父兄課スルニ學問ヲ以テセ  
ズシテ一ニ其為ス所ニ任ス故ニ君放縱ニシテ規矩  
ニ拘ラズ然レモ好シク本草ヲ學ブ既ニシテ疾漸ク  
愈ヘ安積良齋ノ門ニ遊ビ又昌平黌ニ入学ス嘉永年  
中和蘭ヨリ贈ル所ノ蒸氣船始メテ江戸ニ至リシ時  
君艦中ノ醫師タラン一ヲ請ヒシニ洋籍ヲ讀ムヲ禁

スルノ日ニ當リ洋船ニ試乗スルヲ請フハ犯禁ニ類  
スト言フ者アリ君因テ病ト稱シテ家居スルノ半歳  
許リニシテ事漸ク解ルヲ得タレ氏尚前途ニ頼ミ無  
キヲ以テ籍ヲ移シテ蝦夷地ニ至リ其ノ地ノ医師ト  
議シ金ヲ醵シテ病院及ヒ医学所ヲ箱館ニ立テシカ  
五年ヲ経テ天下漸ク多事ナリ幕府乃チ君ヲ擢テハ  
箱館ノ組頭ト為ス医ヲ轉シテ士ト為スハ蓋シ破格  
ナリ幾クモナクシテ江戸ニ歸リ目付ト為リ外国奉  
行ニ轉シ遂ニ若年寄格ニ進ム君ノ函館ニ在ルヤ命  
ヲ受ケテ佛人メルトツト、テ、カシユンニ日本語ヲ教  
フカシユン後チニ佛国公使ノ通辨官トナル故ニ君

最モ佛人ニ敬重セラル佛語学所ヲ開キ佛人ヲ雇テ  
横須賀製鉄所ヲ起シ佛国陸軍教師ヲ雇フ等皆君ノ  
建言ニ基ク君使命ヲ受テ佛国ニ至リシニ幕府顛覆  
ノ報ヲ得タリ佛人或ハ勸ムルニ申包胥ノ事ヲ以テ  
セシニ君家康ノ遺訓ヲ奉ケテ之ヲ謝ス帰国ノ後函  
館ニ脱走スルヲ勸ムル者アリレカ君従ハズ遂ニ城  
外ニ退キ書ヲ著レテ以テ自ラ遣ル鉛筆紀聞、曉窓追  
録ハ皆其ノ洋行中ノ見聞スル所ヨリ出ヅ近來新聞  
紙大ニ行ハレ各社競フテ名士ヲ聘ス君亦報知新聞  
ノ編輯ヲ管ス

近世名家傳卷之上終



近世名家傳

卷上

三

中西泉

010190530537

